

国際基督教大学 (ICU)

国際基督教大学では、留学はリベラルアーツの学びを補完し、さらに深めるものと位置づけており、学生が主体的に学習計画を立て、留学に臨みます。今回は、フレッシュマンSEAプログラムと交換留学制度をご紹介します。



■ 土本周 さん



■ 鄭朱泳 先生



■ 小島奈那子 さん

国際基督教大学（以下、ICU）について教えてください。

■ 鄭先生

ICU は日本で初めてのリベラルアーツカレッジとして献学されました。献学以来、3つの使命を掲げていますが、そのひとつが「国際性への使命」です。ICU は既にその献学の理念が国家の枠にとらわれない立場をめざす大学でした。ICU の構成員各位が文化的差異を超え、独立した人間としての人格的出会いを経験し、新しい世界における生き方を創造し、世界の問題を自己の問題としてとらえることになります。



さらに、国際的相互理解や交流を実現する為に欠くことのできないものは語学力であり、ICU は献学以来、徹底した日英バイリンガル教育を行っています。学生は、リベラルアーツ英語プログラム (ELA: English for Liberal Arts Program) もしくは日本語教育プログラム (JLP: Japanese Language Programs) を履修することが卒業の要件として課されています。

■ 小島さん

私が入学を志したのは、ICU がリベラルアーツカレッジだからという理由です。少人数教育も魅力で、その中で深い学びができると感じました。

■ 鄭先生

現在は、さらに日英2言語にプラス1言語を習得するようすすめています。留学先の多くは英語で学ぶことができますが、中には習得した中国語やフランス語を生かして留学にチャレンジしたいという学生もいます。より多くの世界の人々とコミュニケーションを取るためにも、複数言語の習得は今後も進めていきたいと思っています。

■ 土本さん

ICU には日英両言語を操れる学生が多く在籍しています。海外に長期間住んでいた経験のある学生

も多くいて、彼らと話すことで強く影響を受けました。

■鄭先生

交換留学制度を通して、150 名ほどの留学生が毎年 ICU に在籍しています。これも ICU の特徴のひとつですね。キャンパス内にある学生寮では学生が国籍や学年などの区別なく共同生活を行っています。現在は約 900 人、全学生の 30 パーセントが学内で生活することができます。

■小島さん

自分が留学を希望している大学の学生が交換留学生として ICU で学んでいることもあります。私は留学前に仲良くなって、オススの授業や寮の様子を教えてもらいました。留学先が具体的にイメージできたので、不安がかなり軽減されました。

■鄭先生

また、多様なバックグラウンドをもった教員も多くいます。90% 以上の教員が海外で学位を取得しています。このように、ICU に通うだけでも、様々な海外の情報が手に入りますし、国際交流の機会があります。また、留学に関しての情報や体験談も入手できます。私自身、学部生と大学院生で 2 回の留学をしており、その経験を多くの学生に話しています。

ICU の留学にはどんな特徴があるのでしょうか。

■鄭先生

目的に応じて様々な留学プログラムがありますが、自分の興味を広げる、自分の力を試す、学習の環境を広げ、深める、また違う角度から興味があることを学ぶ、といったことが挙げられます。リベラルアーツの学びを、世界トップレベルの大学で補完し、深めて欲しいと考えています。そのためには、まずなにより自分の考えを英語で表現できなければなりません。

■土本さん

英語は学びや仕事のためのツールです。英語ができると、広い視野を持つチャンスが得られます。ICU に入学して、そして留学して、様々な人と交流を持つ中で、私はそのことを強く感じました。

■鄭先生

多くの国で学ばれ、話されている言語の代表が英語ですから、英語を身につけることは、世界で学ぶための第一歩ということになりますね。

そのために、ICU では主に日本語を母語とする学生は 1 年次に ELA を履修することになります。1 年次の大半を使って集中的に、大学での学びに必要な英語運用能力と効果的に学ぶための思考力を身に付けます。週 4 コマから 11 コマの授業を、習熟度別に少人数クラスで学びます。

では、ICU の特徴的な留学プログラムについて教えてください。

■鄭先生

ICU には様々な留学プログラムが用意されており、海外英語研修（SEA）プログラム、夏期留学プログラム、国際サービス・ラーニング、交換留学などがあります。

最も参加者が多いのが、海外英語研修（SEA）プログラムです。1 年生が対象となる『フレッシュマン SEA プログラム』は定員が 210 名で、夏休みにカナダ、アメリカ、オーストラリア、アイルランド及びイギリスで行われる約 6 週間の英語研修プログラムに参加します。また 2 年生が対象の『ソフォモア SEA プログラム』もあり、定員は 60 名です。

両方をあわせると夏休みに 270 名の学生が、海外英語研修（SEA）プログラムで短期留学を経験することになります。

留学費用は、授業料・渡航費・宿泊費・保険料などの概算で約 45 ～ 85 万円以上となります。これは渡航先までの旅費、物価、宿泊形態などで総額が変わってきます。また一部の食費や現地交通費などの諸経費は各自が負担することになるので、その金額もプラスされます。

土本さんもこのプログラムに参加しましたよね。



■土本さん

オーストラリアの Monash University に行きました。10代で母国を離れて留学してきたカンボジアやサウジアラビアの学生と仲良くなりました。たくましくのびのびと学ぶ彼らの姿を見て、自分も短期の語学留学だけでなく、1年という長さで留学に挑戦したいと強く思いました。その経験が交換留学をすることの決め手になりました。

■鄭先生

海外で生活し、様々なバックグラウンドを持った同年代の学生たちと触れ合う、ということは本当にいろいろな刺激を与えてくれますよね。

海外英語研修などの短期留学を経験した学生には、次のステップとして長期の交換留学に参加してほしいと思います。短期留学と聞くと、観光やレジャーといった、楽しい面もイメージされるかもしれませんが、それももちろんあるのですが、実際は非常に予習復習が多く、プログラムも短期集中型となり、難易度が上がるということが考えられます。ついていくのがやっと、という学生も多いでしょう。短期間では、なかなかトライアンドエラーの繰り返しができないということもあるでしょう。長期間の留学では、1学期目の反省点を活かして、2学期目にまた別の視点でチャレンジするといったこともできます。その経験が大きく成長させてくれます。ぜひ、多くの学生に長期留学に参加して欲しいですね。そこで、もう一つ紹介したいプログラムが『交換留学制度』です。二人ともこの交換留学の経験者ですね。

■小島さん

私はアメリカの Pomona College に留学しました。ICU の志望理由がリベラルアーツの大学で学びたいからだとお話ししました。留学も同じ理由で、ICU の協定校に本場アメリカのリベラルアーツカレッジがあることを知ったのです。学力・英語力もそうですが、金銭的にも自力ではなかなか入学できないアメリカの大学に、ICU の制度を使って留学できるとわかり、頑張ってチャレンジしました。

■鄭先生

社会人になってからの留学や自費留学の場合、海外の大学は授業料が高額になります。交換留学は「ICU の学生として1年の間、海外の大学で単位取得を目指す」という扱いなので、ICU に通常の授業料を納め、基本的に留学先の大学の授業料と施設費は免除されます。自費留学に比べて非常に安価に留学にチャレンジできるのも特徴ですね。

交換留学では、渡航費、住居費、協定校施設使用料等の諸経費、ICU 指定の海外旅行傷害保険料、留学先の協定校で指定がある場合はその保険料、ビザ申請にかかる諸経費、食費・現地交通費・交際費などの生活費、個人で旅行に出かける場合の費用などが必要になります。渡航先・住居のタイプによって異なりますが、概算で 60 ～ 200 万円と考えてもらうといいでしょう。

■土本さん

私が ICU に入学した理由は、留学制度が整っていること、それと開発学が学べることが決め手でした。開発学はイギリス発祥の学問。ICU で開発学を学ぶことはもちろん、イギリスで先進的な最新の研究を学びたいと考えていました。本場のイギリスであれば、世界中から開発学を学ぶ留学生が集まります。そのような学生と共に学ぶことは、ICU とはひと味違う経験ができると考えたのです。希望が叶い、イギリスの University of East Anglia で開発学を学びました。本当に刺激的な毎日で、考え方や人生の捉え方も変わりましたね。

■鄭先生

希望通りの大学に留学を果たせた、ということは二人はしっかりと準備をしたということですね。

交換留学の応募時期は2年次の秋です。ですが、実際には1年次から交換留学に向けて準備を進めることが大切です。ICUの交換留学プログラムは23ヶ国71大学と協定を結んでおり、定員枠は約150名。約4人に1人の枠がありますが、その選考は、非常に厳密に行われます。

まず、自分が留学したい大学を、協定校の中から探すことから始まります。そのために、留学経験をした先輩にインタビューを行ったり、小島さんのように交換留学でICUに来ている学生を探して話を聞いたり、資料を通して海外の大学の情報を集めます。教員に相談することも大切です。ICUでの成績やTOEFL・IELTSなどの英語のテストスコアも一定のレベルを満たす必要があります。また、自分がなぜその大学で学びたいのか、なぜその学問を学ぶために留学が必要なのかということについて英語のエッセイにまとめ提出します。その後、英語で面接が行われ、「学生の素養、学力、希望と留学先の大学はマッチしているか」が考慮され留学が内定します。

また、留学先が決定しても、その後、成績などにより、資格が取り消されることもあります。つまり、3年次に交換留学を希望する学生は、入学当初から目標を明確にして計画を立て、努力を続けることが大切なのです。

このプロセスは大変かもしれません。ですが、この準備をしっかりと行うことで、自分がどんなことを学びたいのか、なぜ留学をしたいのかが明確になりますし、そのために相手に論理的に説明する方法も考えることになります。多くの人の考えを聞き、自分の理解を深め、昇華するプロセスを経験します。学生はこの期間を通して、素晴らしく成長しますね。

留学先決定後も、オリエンテーションが何度も行われ、危機管理の情報などを共有することになります。

選考にチャレンジするのはとても大変そうですが、学生の皆さんの多くが留学を希望されているのですか？

■鄭先生

もちろん全員が留学を希望するわけではありません。留学に行かずICUで学びを深めるという選択をする学生もいます。ですが、留学を志そうという文化はICUに根付いていますね。それは身近に留学生がいて授業や学生寮で共に学び生活している、教員にも留学経験者がいる、先輩たちの多くも同じ道を通して留学を経験している、という環境があるからでしょう。彼らと接すると、留学で受けた刺激や素晴らしい経験を聞かせてくれます。帰国した同級生を見て、4年生で留学を決意した学生も少なくはありません。

留学をすることの意義、素晴らしさについてはみなさんどのように感じられていますか？

■鄭先生

第一には、先ほどお話しした、視野を広げる、異文化に触れるという点があります。そして、グローバル化を肌で感じながら、自分がマイノリティになるという経験は大きいと思います。日本にいた間は、いかにICUが国際交流が盛んな場とはいえ、マジョリティであることは変わりません。近くには友人がいて、家族がいる。留学はその環境から離れ、一人っきりで毎日を切り開く環境に身を置くことになります。その中で、自律性が磨かれ、様々な刺激に敏感になり、新たな視野や考え方が身につく。それが昨今よく叫ばれている「グローバル人材」になくてもならない視野であり考え方だと思っています。

新たな環境でゼロから関係性を構築するというこの経験は、社会に出たときにも役に立つでしょう。

■小島さん

先生がおっしゃるとおりだと思います。私は留学中に世界中からやってきたたくさんの留学生、つまり私と同じ立場の、アメリカではマイノリティとされる学生たちと仲良くなりました。留学生とはいえ、もちろんネイティブと比べて全く遜色ない英語を操り、とても優秀で頭の切れる彼らと寝

食を共にして、人生について語り、感じたことは「自分はまだまだだなあ」ということでした。世界は広いなと。もっともっと勉強しなければいけないと思いました。

また、アメリカで1年間過ごし、ジェンダーや人種といったトピックスに敏感になったとも思います。女性の権利についてなど、日本にいた頃は考えもしなかったけれど、帰ってきてから性差で区別するような発言を聞いたりした時に、「ちょっとそれっておかしくないかな」と考える癖ができました。日本が遅れているとかアメリカが全て進んでいるとは言いませんが、そういう問題意識を持てるようになったことは嬉しいです。

■土本さん

私は13人の学生と一つのフラットで生活していました。特に仲良くしていた友人には、「歴史を学んで、卒業後まずは政府に就職し、最終的には政治家になりたい」というイギリスの学生や、すでに数年イギリスで看護師として働き、現在は助産師になるための勉強をし、いずれは母国に戻るといふスペインの学生などがいました。現地の学生には、しっかりと将来のビジョンを持ち、それを自分の言葉で自信を持って語れる学生が多いように感じました。そうした勇敢で、素直な学生に影響を受け、自分も目標の大小に関わらず、口に出し、自信を持つことは大切だと思いました。行動が変わったひとつのきっかけですね。

■鄭先生

学部生での留学は、二人のように様々な貴重な経験をする事ができるはずです。その経験を通し、自らを振り返り、守るべき自分の考え方や行動が見つかり、逆に変わっていく思想や言動に気付くことでしょう。経験や刺激が今後の人生を豊かにしてくれるきっかけになる。それが留学の素晴らしさであり、参加する意義でもあると思いますね。

実際に留学を経験し、お二人（小島さん、土本さん）の考え方や学び方に変化はありましたか？

■土本さん

留学した大学の開発学のコースでは、必ずフィールドワークに行かないといけませんでした。私は当初、調査に出ることに消極的だったのですが、積極的に調査を行う周囲の学生と話すうちに、自分もフィールド調査を行いたいと考えようになりました。このことだけでなく、現地の学生の積極的な授業参加には、学ぶことが多く、受け身で授業を受けてはもったいないと感じるようになりましたね。

■小島さん

私も土本さんと似た経験をしました。留学に行く前は個人的な学習しかしていませんでした。もちろんディスカッションなどは積極的に参加していましたが、「クラスメイトから学ぶ」「クラスメイトと学ぶ」という感覚はあまりなくて…。でも留学先で、クラス外でもクラスメイトと集って一緒に協力しあって課題に取り組んだことがあったのですが、その経験を通して、自分もクラスに貢献するし、クラスメイトからも学ぶ、という意識が芽生えたと思います。積極的に自分の意見を発言し、学ぶことに対しても前のめりになれたと思っています。



■鄭先生

他にも、留学先で得た刺激で、卒業論文のテーマを決める学生や、進路が決まる学生も多くいます。土本さんも国際協力の仕事がしたい、というのが留学のひとつの理由でしたね。

■土本さん

はい。将来、国際協力に関する仕事に携わりたいと思う以上、英語はついて回ります。ELAで学ん

だ英語を、実際に逃げ場のない環境においてさらに磨きたいと考えたのも留学の動機の一つでした。ですが、実は国際協力の現場や、海外に進出している企業に興味はあったものの、住み心地のいい日本を離れ、海外で働くことには抵抗があったのです。しかし、「国とは何か」と考えてしまうほどに世界中のものや人の流れは流動的になりました。また、イギリスや旅先のヨーロッパ諸国には、いろいろな人種、バックグラウンドの人がいました。学生の中にも、若いうちから母国を離れ、異国で勉強をする人もいて、そうした人々のたくましさや、どんなバックグラウンドの人でも広く受け入れる寛容な人間性に影響を受け、「海外で働く」ということがイメージしやすくなり、ポジティブに考えられるようになりました。これらは、実際に深くその国に住んでみないとわからないことだと思いますね。

留学前のイメージと違ったところ、これから留学する人に伝えておきたいことはありますか？

■小島さん

違っていたというより、想像を超えていた、という感じです。留学前から「アメリカの大学の授業は予習が大変で、ついて行くのが大変」という話は耳にしていたのですが、予想よりも大変でした。ディスカッションなどで発言するのはもちろんですが、特に大変だったのはライティングだと思います。アメリカの大学ではとにかく量を読み、書かされます。ICUのELAでアカデミック・ライティングを学んでいたことは大きな助けになりましたが、それでも、短期間の間に次から次へと迫ってくる課題の提出日にいつも泣かされていました（苦笑）



■土本さん

アカデミックな場面で使用される英語と、日常会話で使う英語は全く違うということです。留学では、日常会話をする機会も多いので、慣れておく必要があります。そのことはいろんな留学経験者から聞いていたので、洋画を英語音声で見たり、サッカー中継を英語で聞いたりすることで耳を慣れさせていました。また、ICUのクラスや、所属するサッカー部にいる留学生と、積極的に話すようにしましたね。それでも留学してみると、伝えたいことをうまく伝えられないという状況が多かったので、日頃から慣れる努力はしておく方が良いと思います。



最後に、留学に興味を持っている高校生へのメッセージをお願いします。

■小島さん

私は「もう少し真面目に単語を勉強していればよかったなあ」と思っています。高校時代には、単語の本を一冊渡されて、その中から毎週単語テストがあったのですが、恥ずかしながらテストの直前に必死で暗記するというのを繰り返していたため、あまり定着していませんでした。留学先では、膨大な量のリーディングをこなすことになるので、語彙力はあればあるだけいいです。単語は地道にコツコツと増やしましょう！

■土本さん

私は、どんなことを勉強したいか、その学問に強い国や大学はどこか、ということを高校時代から考えていました。結果的に、高校時代に夢見ていた国で、学びたい学問を勉強できたので、早い段階からビジョンを持つことは重要だと感じています。

後悔していることは、クラスにいた留学生や、先生ともう少し話しておけばよかった、ということ。つたない英語でも、相手に理解してもらえると自信にもなり、「また話してみよう」と次への勇気になります。学校で英語を使う機会がなければ、街や駅で困ってそうな外国人旅行客に話しかけてみるのもいいと思います。英語を練習するいい機会になりますし、海外に興味を持つきっかけになるかもしれません。

■鄭先生

高校時代から、就職まで考えて大学を選ぶという縛り付けは、あまりして欲しくないですね。それよりも、未来で自分を待っている経験や刺激で自分がどう変わるのか、そんなことに興味を持ってもらいたいです。

ICU への入学や留学を考えている人には、グローバル・マインドを養って欲しいと思います。ニュースなどを通して、世界でどんなことが起こっているのか、人はそれに対してどのように考えているのかを、自分なりに考えて、意見を持って欲しいです。

あとは英語はもちろんですが、世界史を知っておくこともよいと思います。様々なバックグラウンドを持つ人たちと関わるには、相手の国の歴史を知っていることは助けになりますし、会話も盛り上がります。高校生向けの国際交流イベントなども最近は多く開催されているので、参加してみるのもいいですね。

日本人は「察する」という特徴があると思います。それは美点でもあります。往々にして「空気を読んで黙ってしまう」「わかったと思って話さない」「意見を言わない」ということがあります。それでは留学で力がつきません。勇気を出して、自分の言葉で意見を言う、伝える努力も大切です。

●インタビューに答えていただいた方々●



■鄭朱泳先生 (ジョン・ジュー・ヨン／JUNG, Joo-Young)

South Korea Daeil Foreign Language High School 出身
Yonsei University Social Science 学部 media and communication 専攻
University of South California 大学院 Communication 博士課程修了



■土本周さん

国際基督教大学教養学部アーツサイエンス学科 4 年生 (2017 年 4 月取材当時)
私立青山学院高等部出身。開発学を学ぶため国際基督教大学 (ICU) へ入学。
開発学の本場であるイギリスで最新の研究を学ぶため University of East Anglia
へ 1 年間留学。毎日が刺激的で考え方や人生の捉え方も大きく変化。将来は国
際協力に関する仕事にかかわりたい。



■小島奈那子さん

国際基督教大学教養学部アーツサイエンス学科言語教育学専攻 4 年生 (2017
年 4 月取材当時)
神奈川県立川和高等学校出身。リベラルアーツカレッジで学ぶため国際基督
教大学 (ICU) へ入学。ICU の留学制度を利用し、1 年間アメリカ Pomona
College へ。本場アメリカのリベラルアーツカレッジでは、世界中からやってくる
多くのクラスメイトと共に学び、協力し合う経験を通し、学ぶことへの意識がより
積極的に。